

esplanade

FUKUOKA ART MUSEUM 福岡市美術館

esplanade［エスプラナード］
JANUARY 2025 | NO.218

esplanade

［エスプラナード］

JANUARY 2025 | NO.218

contents

03　所蔵品紹介

04　モナ・ハトゥム氏の作品が、
恒久設置されました

06　プレゼンバトル リターンズ！
今回は近現代美術編

08　田中千智「生きている壁画」の
これまで・これから

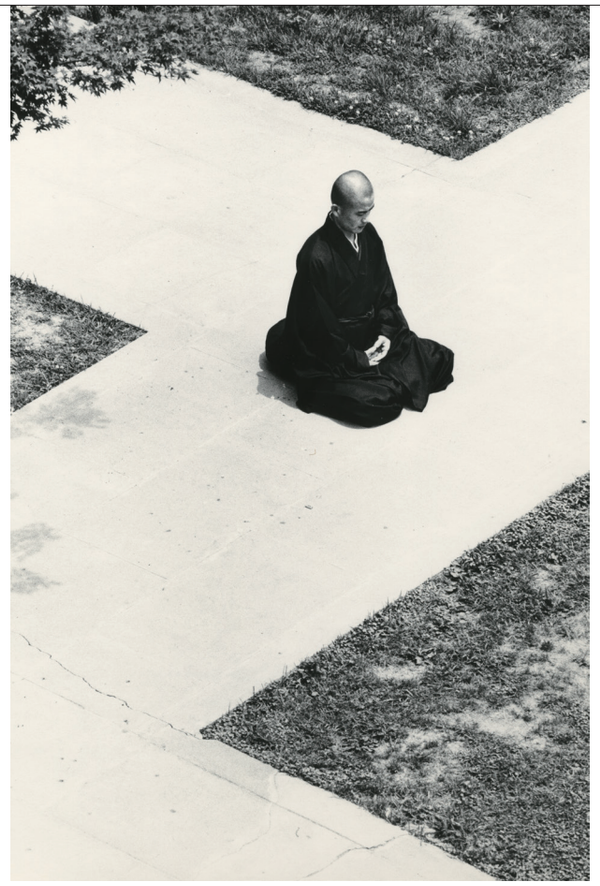
10　美術館スケジュール（1〜3月）

今回取り上げた2人のアーティスト。1人は、当館に新しく設置された《+と−》の作者であるモナ・ハトゥム。《+と−》は1994年に「ミュージアムシティ・天神'94[超郊外]」で初公開され、その後、世界各地で別バージョンが展示されています。30年という時を経て福岡に戻った本作は、当館の展示空間に大きな変化をもたらしました。その佇まいを、ぜひご覧ください。

もう1人は、福岡で精力的な活動を続ける田中千智。当館2階の3年にわたる壁画プロジェクトは、ついに最終章を迎えます。本作のコンセプトは「変化する」壁画。1月には現場で最後の公開制作を行います。皆さんも、ぜひ「変化」の目撃者になってみませんか？ご来館をお待ちしております！

所蔵品紹介

禅 坐禅・境内（石川県能登）「ジャパネスク」より



© Narahara Ikko Archives

奈良原一高 NARAHARA Ikko（1931–2020年）
1969（プリント1978）年
ゼラチンシルバープリント
縦 34× 横 22.6cm

坐禅するひとりの僧をカメラが俯瞰してとらえています。画面をジグザグに走る舗装された小道と、フレームに切りとられた芝生とがもたらす動的なリズムが、禅僧のまとう厳粛さと対照をなし、印象的な構図を生んでいます。

本作は、戦後日本を代表する写真家、奈良原一高によるシリーズ「ジャパネスク」の構成章のひとつである「禅」の一枚。能登半島の曹洞宗總持寺祖院の坐禅堂の前で撮影されました。

奈良原は、1956年開催の初個展「人間の土地」をきっかけに写真家として歩み始めます。外界から隔絶された土地でなお逞（たくま）しく生きる人々を写し出し、大きな反響を呼びました。

その後、1962年より活動の場をヨーロッパに移し、3年間滞在。ヨーロッパでの生活は、逆説的に、奈良原自身がこれまで「あまりにも身近で遥かな国という感」がして、「容易に接近できないものであった（注）」と語る日本へ目を向ける契機となります。

帰国後、日本の伝統文化を再考するシリーズに着手。滞欧中に自身の信仰や宗教について尋ねられるたびに当惑した奈良原は、日本の宗教について考えざるを得なかったといいます。「禅」もテーマのひとつとし、多彩な表現方法を駆使しながら僧たちの修行の様子を写し撮り、禅の精神性を伝えようと試みました。

（注）奈良原一高「近くて遠かな国」への旅」、『カメラ毎日』1968年3月、42・43頁。
※本作はコレクション展「奈良原一高『ヴェネツィアの夜』『ジャパネスク』」（近現代美術展示室B、3月23日まで開催）で展示中です。

——臨時的任用職員（近現代美術係）髙山環

新たな作品がやってきました！
モナ・ハトゥム氏の作品が、恒久設置されました

国際的に活躍する現代美術家モナ・ハトゥム氏が、当館のために特別に制作した作品《＋とー（プラスとマイナス）》が設置されました。様々なことに思いを馳せることができる作品です。ぜひご覧ください。



《＋とー》
1994/2024年
ステンレス鋼、砂、モーター　※表紙の作品

国内外の多くの美術館には、女性作家の所蔵品が少ないという課題があります。背景には、女性の役割が家庭と結びつき、女性作家が社会の中で自己実現をしていくことが困難で、その名前も作品も残りにくかった長い歴史があります。

同じ課題を共有する当館では、近年、女性作家に光をあてた企画や収集に取り組んでいます。例えば、２０２３年の作品収集の目玉は塩田千春《記憶をたどる船》でした。モナ・ハトゥム《＋とー》も、こうした当館の取り組みの一環になり、しかも建築と一体化させた恒久的な展示作品として新たに制作していただきました。

この大型の《＋とー》は、１９９４年の「ミュージアム・シティ・天神94［超郊外］」で初めて世に紹介された作品です。モダンアートバンクヴァルト（博多区千代）に展示され、その後、同作の別バージョンが世界各地で発表されてきました。まさに《＋とー》は、福岡から旅立ち世界を巡り、30年を経て福岡に帰って居場所を見つけた、と言えるでしょう。

砂の上を回るバーが文様を作りだすと同時にかき消していく本作は、ポジティブとネガティブ、創造と破壊、生と死など、対立するふたつの力が相互に作用しながら繰り返される世の原理を示しています。その構想の源には、パレスチナ人の両親のもとレバノン・ベイルートに生まれ、ロンドン旅行中に勃発した内戦により帰郷できなくなった作者の体験があるでしょう。作者は、繰り返される戦争と平和をも想起させつつ、同時にネガティブのあとにポジティブが訪れるという希望を託しています。

世界各地で発表された本作は、作者の代表作のひとつとなっています。

―（近現代美術係長）ラワンチャイクン寿子

9月14日のモナ・ハトゥム氏を招いてのアーティスト・トーク後に、インタビューを行いました。

―― トークの中で《＋とー》の元となる小さな規模の作品を、既に学生時代に作っていたことをお話されていました。この作品の発想の源泉はなんですか？

ハトゥム　学生時代の私は東洋哲学、なかでも『易経』で述べられているような変化や、陰陽という概念に興味を持っていました。また自分でも実際に、ヒンドゥー教の伝統に由来する瞑想を試したりするうちに、これらに関わるようなオブジェを作りたいと考えたのです。実のところ、私はそれまでは絵の具で絵を描いていたのですが、その静的な性質に満足していませんでした。私はキネティック・アート*に興味をもつようになり、私の初めてのキネティックな作品が、当時、「自己消去のドローイング」と呼んでいたこの作品です。これは、光と闇、生と死、ポジティブとネガティブなど、正反対でありながら互いに関連する二つの力の相互作用を視覚化したものでした。また、アームのゆっくりとした回転が眠気を誘う作品であり、私の先生はこれには心を落ち着かせる効果があると考えて、「みんなの家に一つあればいいのにね」と言っていました。

――《＋とー》はかつて他の多くの国々でも展示されたそうですが、展示される場所によって鑑賞した人の感じ方が変わりそうな作品ですね。

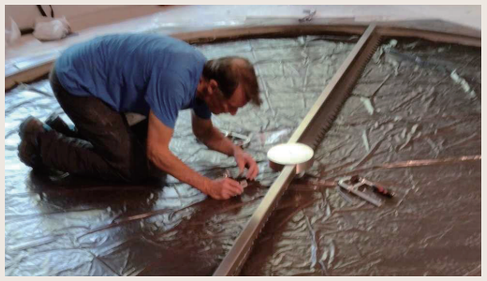
ハトゥム　すべての作品が、展示される状況によって様々に解釈されうると考えています。例として、《その日の名残》という、２０１７年の第10回ヒロシマ賞受賞記念展のために作った作品があります。これは、部屋の家具が配置されたまま焼け焦げ、その残骸が金網でかろうじて支えられたような作品です。これはもちろん広島の原爆投下を念頭に置いたものでしたが、ロンドンで展示したときにはちょうど起こったばかりの、多数の死者を出したタワーマンションの火災に言及する人が多くいました。しかし私の考えでは、これはとても普遍的な作品で、というのも、今日の世界の至る所で起こっている戦争や森林火災などの環境災害の直後の光景と結び付けられるからです。

私は、見た人が自分自身の言葉で解釈し、自身の経験や背景と関連づけられるような、自由に解釈できる作品を作るのが好きです。《＋とー》もそのような作品だと思います。

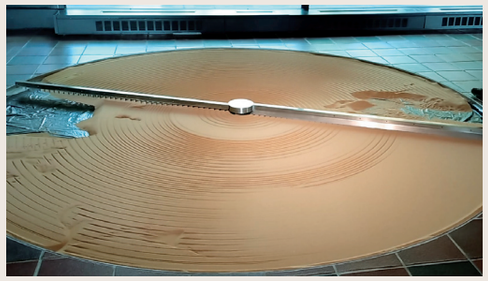
――社会にアートがある意義を、どのように考えていますか？

ハトゥム　芸術は人々の創造性や想像力に働きかけます。究極的には、それは立ち止まって考える瞬間を与え、社会の規範や価値観に挑むような新しい考え方をもたらします。アート鑑賞は早くから始めるべきで、創造的な思考を早い時期から促すために、教育システムに組み込むべきだと考えています。

*風などの自然やモーターなどの機械によって動く美術作品のこと。



ハトゥム氏の作品を技術面で支えるJürgen Steger氏がドイツから来福。



モーターを取り付けた後に砂を入れて動作を確認し完成しました。



モナ・ハトゥム　Mona Hatoum

1952年レバノン・ベイルート生まれ（両親はパレスチナ人）、英国在住。1975年英国旅行中にレバノンで内戦が勃発し、帰国できなくなる。自身の経験をもとに、疎外された人間の苦しみや政治的抑圧など社会の矛盾を表現するアーティストとして国際的な評価を得ている。

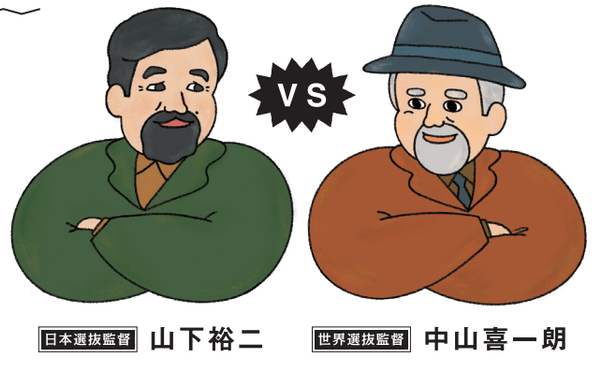
Portrait of Mona Hatoum, Berlin 2022.Courtesy of Neuer Berliner Kunstverein(n.b.k.). Photo Jens Ziehe

本作品は、2階近現代美術室でご覧いただけます。

プレゼンバトル リターンズ！

今回は 近現代美術編

美術史家の山下裕二さんと中山喜一朗総館長が、当館の古美術コレクションをテーマに戦ってから、はや一年。好評の企画が戻ってまいりました。今回は一万点を超える近現代美術コレクションの中から、山下さんが「日本選抜監督」、中山総館長は「世界選抜監督」として、5点の逸品を選び、先鋒・次鋒・中堅・副将・大将の順にプレゼン。その模様の一部をレポートします。



日本選抜監督 山下裕二　　世界選抜監督 中山喜一朗

先鋒戦　ポップな二人

中山　まず先鋒として私が推したいのは、アンディ・ウォーホル《エルヴィス》（画像1）。実はこれシリーズで10数作あるうちの一つ。当館のものは、ウォーホルが死ぬまで手元に残していたものです。山下先生、この作品と他のエルヴィスとの違いがおわかりになりますか？

山下　福岡市美の作品には、シルクスクリーンの背景の部分が黒く映り込んでますね。

中山　そう！いわば「初号機」だったから売らなかったのではないかと私は推理しています。これ以降、調整して背景がクリアになっていきます。そして私は、「写楽」との共通点を感じるんですよ。

山下　なるほど、写楽ですか。役者を描いたいわゆる「細判」ってやつと、この《エルヴィス》は縦横の比率や構図がほとんど一緒ですね。

中山　共通しているのは、みんな舞台上の姿で見得を切っているところ。実はウォーホルって浮世絵のコレクターでした。だから知っていたのじゃないかと思うんです。

　さらに浮世絵の死絵というジャンルでは、歌舞伎役者なんかが亡くなった時にたくさん描かれてきました。ウォーホルの有名なマリリン・モンローの絵があるでしょう？　あれは彼女が自殺した後に描かれた、まるで死絵です。つまり、ウォーホルはアメリカに生きた現代の浮世絵師なんじゃないかと、私は思っています。

山下　なんと。素晴らしくおもしろいストーリーをお話しいただきました。

　対する私は、日本の誇る横尾忠則さんの《暗夜光路 旅の夜》です（画像2）。全国のＹ字路を写真に撮り、それを元にキャンバスにイメージを描いています。私は横尾さんと親交があり、「山下さんってイニシャルがＹ．Ｙ．だね。一緒にＹ字路を見に行こうよ」なんて誘っていただいたことも。実現はしていませんが（笑）。

　横尾さんは１９７０年に「少年マガジン」の表紙をデザインしています。当時広島に住んでいた山下少年は、本屋で衝撃を受けました。「なんかわからんが、少年マガジンが芸術しとるのぉ」って。このぶっとんだデザインが、芸術と私の出会いの原体験なんです。

中堅戦　タフな二人

中山　つづいてアンゼルム・キーファー《メランコリア》です（画像3）。私はこれを見るとすごく不吉な気持ちがします。彼はナチスのことなども作品にしていますから。これは旅客機ではなく、爆撃機だと思うのですよね。

　１９９３年に日本で大規模に行われたキーファーの個展名が「メランコリア」で、この作品はタイトル作品でした。

山下　２０２５年に京都の二条城で個展が行われることが発表されています。これはすごい個展になるでしょうね。

　僕の方は、中ハシ克シゲの《Nippon Cha Cha Cha》で対抗しようと思います（画像4）。これはなんというか、日本の曖昧で漠然としたイメージがテーマになっています。ただ金属で作られていて、素材には違和感がある。これもまたこの美術館の中で大きな存在感を放ってお出迎えしてくれますね。

大将戦　シュールな二人

中山　いよいよ大将戦です。最強の人を選びました。サルバドール・ダリの《ボルト・リガトの聖母》です（画像5）。

山下　これは彼の作品の中でもずいぶん大きなものですね。

中山　聖母子を中心に置き、周りに風景を描く祭壇画は、キリスト教圏において古くから伝統があります。祭壇画にありそうなものをバラバラにして背景に描いていて、これは「原子核の風景」だと言われます。彼は原子力という最新科学に魅了されていました。

　さらにもう一つポイントが。聖母の顔が、彼の妻のガラになっているところ。これはどういうことか。

　これが先程の山下先生の「なぜこんなに大きいのか」に対する答えだと思います。これは実際の彼の祭壇画なのです。彼の信仰の対象は、妻であり科学なのだと思います。

山下　さて私の方は、日本のシュールレアリストで対抗しようかな。こちら藤野一友の《眺望》です（画像6）。女性がパースペクティブの中にズラリと並んでいます。壁の上には子どもたち、遠くには風景が描かれます。おそらく彼にもダリの影響があったのじゃないか。藤野さんはリアルな描写力がしっかりある人で、僕は好きだな。ダリと並べると親和性がありますね。

中山　ただ女性観がだいぶん違うように見えます。藤野の方はずいぶん抽象化された女性像ですね。

山下　彼の妻・岡上淑子も優れたコラージュ作家ですよね。近年こちらで二人展が行われたとか。見たかったなぁ。

　さて、プレゼンバトルは、当館の作品に軸足を置きながらも、縦横無尽なエピソードが飛び交うスリリングな展開になりました。どちらが勝ったのかは、観客一人ひとりに委ねられました。









画像2



画像1



画像4



画像3

画像1 アンディ・ウォーホル《エルヴィス》1963年
©2024 The Andy Warhol Foundation for the Visual Arts, Inc. / Licensed by ARS, New York & JASPAR, Tokyo G3705

画像2 横尾忠則《暗夜光路 旅の夜》2001年

画像3 アンゼルム・キーファー《メランコリア》1989年

画像4 中ハシ克シゲ《Nippon Cha Cha Cha》1993年

画像5 サルバドール・ダリ《ボルト・リガトの聖母》1950年
©Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí, JASPAR Tokyo, 2024 G3705

画像6 藤野 一友《眺望》1963年



画像6



画像5

いよいよ最後の加筆へ！

田中千智「生きている壁画」のこれまで・これから

当館2階の、〝変化する〟壁画のプロジェクトが、最終段階を迎えます。3年にわたる変化の経緯をご紹介します。

2023年のはじめ、2階近現代美術室の最後の壁に現れた、田中千智さんの壁画。3年間に1度、アーティストによる作品を発表するプロジェクトとして始まりました。

今回の壁画制作の大きな特徴が、1年ごとに加筆され、変化していくことです。田中さんは、前回のインタビューで「時間と共に壁画を変化させていきたいと考えています。壁画がこの場にあり続ける3年の間にまた社会を取り巻く環境が大きく変わるかもしれません。1年後、2年後、3年後に自分が何を感じ、考えているか分からない。様々な変化に向き合いながら、その時点で自分の身体を通して得たものを大事にし、絵にしていこうと考えています」と話していました。

実際の壁画には、争いの絶えない世界で人々がたくましく生きる姿が描かれています。ここには、私たちを取り巻く環境の変化や、その中で抱く希望を見る人それぞれが読み取ることができるでしょう。

いよいよ1月から、3年目の制作と公開が始まります。ぜひお楽しみに。

――学芸員（近現代美術係）忠あゆみ

1年目

［制作期間］
2023年1月5日(火)～31日(月)

夜の森の風景が広がっています。
田中作品の特色である黒い画面を背景に、色とりどりの服を着た子どもたちが光っているように見えます。へび、ふくろう、オオカミは、静かに子供たちを見守るかのよう。地面の白い部分には柔らかいタッチで絵の具が置かれ、はかなげな印象になっています。



2年目

［制作期間］
2024年1月5日(金)～27日(土)

明かりが灯ったかのように、三角形状の黄色い背景が現れました。森の背後に空間が生まれています。右手には船と港の風景が、左手には街が見えます。色彩豊かなモチーフが増える一方で、戦争や災害を思わせる炎や壊れた家々があり、現実とリンクするかのようです。



To Be Continued...



制作を控えた田中さんに、意気込みをお尋ねしました。



©Miyuki Toudou

早いものでもう3度目の壁画制作になりました。最近では「壁画見たよ、これからどうなるの？」と気にかけてくれる方とお話しすることもあり、嬉しく思っています。3年かけてひとつの作品のことを考えながら生活をするというのは、大変貴重な時間でした。ただ現時点で、私の頭の中にはまだ最終の絵がみえていませんが、不安でもあり楽しみでもあります。

田中千智「生きている壁画」公開制作

2025年1月7日(火)制作開始、(公開制作 ～1月末/壁画公開 ～12月末)　2階近現代美術室ロビー

完成記念トークイベント

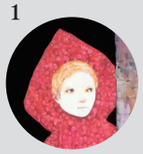
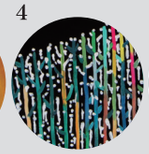
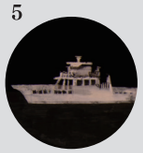
2月22日(土)14:00～15:30 ミュージアムホール
※詳細は当館ホームページにて順次アップいたします。

壁画制作の経緯と田中さんのインタビュー「3年間、生き続ける絵に」は、エスプラナードNo.210でお読みいただけます。ぜひチェックしてみてください！

気になる細部

大きな画面を隅々まで観察すると、細部まで手が加わり、イメージが変化していることが分かります。ぜひ、目を凝らしてみてください。

1・2 赤ずきんの人物の表情が変化しています。
3 黄色い面の中にも神話のような世界が広がっています。
4 突如現れたカラフルな竹藪。
5 船のモチーフ。田中さんの拠点とする能古島での生活を反映している。

1 
2 
3 
4 
5 

美術館スケジュール　●休館日

1月　2月　3月

特別展（2階）

1月25日（土）−3月20日（木・祝）
- 誕生85周年記念
  トムとジェリー展 君が笑うと、僕も笑っちゃう
  （お問い合せは本展事務局（西日本新聞イベントサービス内）TEL 092-711-5491へ　平日9:30〜17:30）

コレクション展 近現代美術（2階）

通期
- コレクションハイライト（近現代美術室A）

12月10日（火）−3月23日（日）
- 雪景色（近現代美術室A）

温暖な九州ではなかなか見ることができない、雪景色を描いた作品を紹介します。

12月18日（水）−3月23日（日）
- 奈良原一高「ヴェネツィアの夜」「ジャパネスク」（近現代美術室B）

通期
- コレクションハイライト（近現代美術室C）

コレクション展 古美術（1階）

11月27日（水）−1月19日（日）
- 生誕260年 世を観る眼 白醉庵（はくすいあん）・吉村観阿（よしむらかんあ）
  （古美術企画展示室）

1月22日（水）−3月16日（日）
- 染と織の美術
  （古美術企画展示室）

当館のコレクションを通して、
染や織の技法や作品の魅力をご紹介します。

10月29日（火）−1月26日（日）
- 松永耳庵と福岡ゆかりの品々（松永記念館室）

1月28日（火）−3月23日（日）
- 高麗茶碗と和物茶碗（松永記念館室）

通期
- 東光院のみほとけ（東光院仏教美術室）

LECTURE

つきなみ講座

JANUARY-MARCH 2025



毎月1回、当館学芸員が、自分の仕事、展示、研究、関心ごとについて語ります。

※聴講無料、申し込み不要 ※先着順（30分前開場） ※定員等は変更になることがあります。詳細は美術館ホームページをご確認ください。

1月 台湾を舞台にした美術

日本の統治下にあった20世紀前半の台湾。そこを舞台に活躍した台湾人画家や台湾を訪問した日本人画家を紹介します。彼/彼女らはどのように自分らしい表現やテーマに向き合ったのでしょうか。

日時：1 月 25 日（土）15:00〜16:00
会場：レクチャールーム（定員 54 人）
講師：ラワンチャイクン寿子（近現代美術係長）

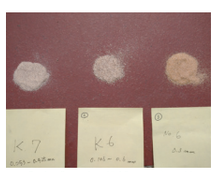


南風原朝光《南海魚》1943年
福岡市美術館蔵

2月 モナ・ハトゥム《+と−》の設置と通訳翻訳その他諸々

今年度、新たに設置されたモナ・ハトゥムの《+と−》。位置を決め、穴をあけ、砂を選び、電気を通し…という設置が実現するまでの半年間について、国際渉外担当の視点からお話しします。

日時：2 月 15 日（土）15:00〜16:00
会場：レクチャールーム（定員 54 人）
講師：太田早耶（国際渉外担当）



《+と−》の砂の候補サンプル3種

3月 教育普及担当学芸員によるオーストラリアの美術館レポート

国立アートリサーチセンター主催のスタディ・ツアーに参加し、2024年12月に訪問したオーストラリアの美術館について現地の教育プログラムを中心に学芸員がレポートします。

日時：3 月 15 日（土）15:00〜16:00
会場：レクチャールーム（定員 54 人）
講師：﨑田明香（学芸員・教育普及担当）



福岡市美術館の教育プログラム
「ファミリーDAY」の様子

ギャラリー A-F 2階

1月7日（火）〜1月13日（月・祝）
- 第71回福岡県小学校児童画展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

1月15日（水）〜1月19日（日）
- 令和6年度中央区高齢者作品展（ギャラリーA）
- 日本書写研究所 習字教室 第33回書写コンクール作品展（ギャラリーB,C,D）
- 和田四空個展 甲骨文・金文「感謝の喜寿展」（ギャラリーE）
- 福岡水の会書展（ギャラリーF）

1月21日（火）〜1月26日（日）
- 福岡市中学校書作品展（ギャラリーA）
- 第56回九州産業大学造形短期大学部 卒業制作展（ギャラリーB,C,D,E,F）

1月28日（火）〜2月2日（日）
- ファインアート展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

2月4日（火）〜2月9日（日）
- 第74回福岡市中学校美術展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

2月11日（火・祝）〜2月16日（日）
- 令和6年度水源の森ポスター原画コンクール（ギャラリーA）
- 第8回福岡市立博多工業高等学校インテリア科 卒業制作展（ギャラリーB,C,D）
- 第23回絵画造形教室おそらのぞうさん作品展（ギャラリーE）

2月18日（火）〜2月24日（月・休）
- 第91回独立展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

2月26日（水）〜3月2日（日）
- 第50回西日本書美術展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

3月4日（火）〜3月9日（日）
- 2024アジアデジタルアート大賞展FUKUOKA（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

3月11日（火）〜3月16日（日）
- 福岡二紀展2024（ギャラリーA,B,C,D,E）
- 第63回卒業展覧会（ギャラリーF）

3月18日（火）〜3月23日（日）
- 第108回二科展 巡回福岡展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

3月25日（火）〜3月30日（日）
- 福岡市美術展（ギャラリーA,B,C,D,E,F）

※展覧会およびイベントに変更が生じる場合があります。来館前にホームページで最新情報をご確認ください。


Park-PFI　清流公園整備管理運営事業（イメージ）


Park-PFI　明治公園整備管理運営事業（イメージ）

AZUSA SEKKEI 梓設計

本社　〒144-0042　東京都大田区羽田旭町 10-11
九州支社　〒810-0004　福岡市中央区渡辺通 5-23-8
https://www.azusasekkei.co.jp

福岡市美術館ミュージアムイベント協賛企業・団体

GRANDE MAISON SEKISUI HOUSE　大王製紙株式会社　QTnet　福岡銀行　NIPPON EXPRESS
ウエスト　人につくす、街につくす。セイワ世研　AZUSA SEKKEI　九州電力 ずっと先まで、明るくしたい。　草苑

ふくおか応援寄付

福岡市美術館が魅力的であり続けるためには、今後とも機会あるごとに美術品を収集することが不可欠であり、そのための資金として皆さまから「ふくおか応援寄付」（ふるさと納税による寄付）を募集しています。

わたすclub

会員になると、展覧会や映画などの料金がオトクに!もっと身近にアートのワクワクを感じてみませんか。福岡市文化芸術振興財団のホームページ（http://www.ffac.or.jp/wa/）またはミュージアムショップ店頭で入会受付中。

RESTAURANT
レストラン プルヌス限定メニュー



ファニー　プレート
「Funny Plate」

マカロニグラタンやチーズ入りメンチカツ、エメンタールチーズを模したチーズケーキ等、チーズを使用したバラエティ豊かなお料理をワンプレートでご準備しております。

販売期間
2025年
1月25日（土）～3月23日（日）

2,860円（税込）

福岡市美術館
FUKUOKA ART MUSEUM

福岡市美術館
ウェブサイト
www.fukuoka-art-museum.jp

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6　TEL：092-714-6051（代表）　FAX：092-714-6071
【開館時間】 9:30～17:30（7月～10月の金・土曜日は9:30～20:00） ※入館は閉館の30分前まで。
【休館日】 月曜日、年末年始（12月28日～1月4日 ※月曜日が祝日・振替休日の場合はその後の最初の平日）

esplanade JANUARY 2025 | NO.218

福岡市美術館　季刊誌エスプラナード218号　発行日：2025年1月1日

【制作】福岡アートミュージアムパートナーズ株式会社（西日本新聞社）【編集】浅野佳子（nico edit）【デザイン】dictom design【印刷】株式会社西日本新聞プロダクツ
【発行】福岡市美術館（〒810-0051 福岡市中央区大濠公園 1-6 TEL:092-714-6051 FAX:092-714-6071 https://www.fukuoka-art-museum.jp）